

## 第2回教育委員会臨時会会議録

平成22年8月3日（火）

場所：国立市役所第1・2会議室

出席委員	委員	長	佐藤路子
	委員長職務代理者		米田雅子
	委員		中村雅子
	委員		嵐山光三郎
	教育	長	
出席職員	教育次	長	是松昭一
	教育庶務課	長	武川芳弘
	学校指導課	長	悴田康之
	指導主事		市川晃司
	指導主事		窪田香

国立市教育委員会



○【佐藤委員長】 皆様、こんにちは。きょうは幾分風があるものの依然猛暑日が続いております。これから平成22年第2回教育委員会臨時会を開催いたします。

きょうの会議録署名委員を中村委員にお願いいたします。よろしいでしょうか。

○【中村委員】 はい。



○議題（1） 議案第18号 平成23年度使用国立市立小学校教科用図書の採択について

○【佐藤委員長】 それでは、議案第18号、平成23年度使用国立市立小学校教科用図書の採択についてを議題といたします。

最初に、事務局から説明をお願いいたします。

悴田学校指導課長、お願いいたします。

○【悴田学校指導課長】 議案第18号、平成23年度使用国立市立小学校教科用図書の採択についてご説明いたします。

本年度の調査研究委員会、また、審議会の調査及び審議の経過については、7月の定例教育委員会にてご報告したとおりでございます。

また、国立中央図書館及び国立市公民館において、5月21日から6月21日まで教科用図書展示会を実施いたしまして、17名の市民の方からご意見をいただき、7月の定例教育委員会において資料としてご報告したところでございます。

本日は、審議会報告を受けての採択となります。ご審議のほど、よろしくをお願いいたします。

以上でございます。

○【佐藤委員長】 ただいま学校指導課長から説明をいただきました。平成23年度の小学校使用教科用図書についての審議に入りたいと思います。

7月27日開催の定例教育委員会で、教科用図書審議会から審議結果の報告を受けました。各教育委員は、審議結果やアンケートをもとに、国立市の公立小学校にふさわしい教科用図書についての考えを深めていただいたことと思います。

それでは、各教科ごとにご意見をいただきながら、平成23年度使用小学校教科用図書についての採択をしていきたいと思いますが、よろしいでしょうか。

（「はい」と呼ぶ者あり）

○【佐藤委員長】 それでは最初に、国語からご意見を伺いたいと思います。よろしくお願ひします。米田委員。

○【米田委員】 それでは、国語科の採択に関して、1年生から6年生までの教科書を拝見させていただき、そして審議会の報告を受けた結果、ふさわしいと思う教科書を推薦し、その理由を述べさせていただきます。

私がふさわしいと思いましたが、光村図書の国語教科書でございます。その主な理由といたしましては、1つには、この教科書はかなりほかの教科書に比べて物語文というものが精撰されて多く載っているということです。しかも、あと読む、それから書く、話す、聞く、言葉、そういったものを意識して単元のリード文などもでき上がっているということがありました。

その教材に関して、例えば読むという場合の文では、物語だけではなくて、科学的な物語とか各分野で活躍する方の文章、例えば生化学の中村桂子さんとか、さらに、アニメの高畑勲さんとか、そう

いう方の文章が載っているということが、日本語の文章といってもさまざまあるという、そういったところでもかなり子どもにとって興味、関心がわくところかなというふうに思いました。

さらに、先生たちにとっても、例えば一番5～6年生の場合には、「学習の見通しをもとう」ということで一番最初のページのところに、読む、書く、話す、聞く、言葉というところの表がありました。

さらには、4年生以下では、最後のところに「身につけた力を生かそう」という形で、やはり大切なところをまとめるということのまとめがありまして、ここは子どもも、それから特に先生方にとっては非常に読みやすいまとめになる、そういった編集がされているというふうに思います。

それと特に注目すべきところとしては、6年生の教科書で「『平和』について考える」という1章がありまして、そこでは資料を読み、そしてそれを自分の考えのもと、それをまとめてみる。そして意見文を書くというような形で、単に教材を読むだけではなくて、それに対する自分の考え、さらには調査、そして最終的にまとめとして意見文を書くという、そういうまとめ方をして、平和についてじっくり考え自分で表現するという、そういう1章があるということは、大変国語科だけではなく、これから生きていく上で大事な経験になるというふうに思います。

それから各学年「季節の言葉」というのがありまして、春夏秋冬それぞれ写真や絵やそういった形で季節をあらわし、そしてそれに関する俳句、詩、それから和歌、そういったものを載せていて、日本の場合には四季があるということが日本人の情感を育てる1つのきっかけになっていると思いますので、そういったことを子どものうちから感じさせる、そういう1つのコーナーとして「季節の言葉」というのは非常に読んでいても楽しいなというふうに思いました。

さらには、「声に出して楽しもう」という、そういう特集がありまして、これもある意味日本語のよさですけども、単に黙読するだけではなくに、韻文もそうですけれども、ほかの文章も声に出すと非常にリズムカルで日本語の魅力というものを非常によくわかるということがありますので、そういうものを意識的に1つ「声に出して楽しもう」という特集をしているというところが非常におもしろいなというふうに思いました。

幾つかあとありますが、ほかの委員の方たちがおっしゃると思いますので、私の場合には、今まとめたようなところで光村図書というところを推薦させていただきます。

以上です。

○【佐藤委員長】 ありがとうございます。ほかにご意見いかがでしょうか。

嵐山委員、お願いします。

○【嵐山委員】 私は、光村と教育出版、この2つがどちらでもいいと思いました。

光村は、今、米田委員おっしゃったとおりで、私の感想で1年生に「おむすび ころりん」があるのが気に入っている。みんな「おにぎり」と言うのです。「にぎり」というのは、寿司の握りなのです。空気を入れずに。「おむすび」というのは結ぶなのです。結ぶは心を結ぶ、糸を結ぶという意味で心を結ぶから来ているのです。だから、ひもを結ぶ、「おむすび」というのを堂々と1年生から出していることに好感を持ちました。

それから前も言ったのですが、6年生の「南方熊楠」という非常に難しい。日本で最高級の学識者ですが、細菌学者です。夏目漱石がロンドンにいたときには熊楠が先に来ていて面倒を見たというほどの人で、天皇陛下が御進講をするときに、天皇陛下への献上物は桐箱に入れて差し上げるという慣例がありまして、こんなでかい森永ミルクキャラメルのでかい箱に入れたという逸話がある熊楠です

けれども、熊楠まで入れて、さすが光村は、私も編集者ですけども、編集の方法、立場から見てもよくできていると思いました。

あといいなと思ったのは、教育出版です。教育出版は、3年生でローマ字が出てくるし、俳句では蕪村の「菜の花や月は東に日は西に」、中村汀女さんの句で「せきの子のなぞなぞ遊びきりもなや」などが出てきまして、充実しているなと思って、これも前回ちょっと感想で申し上げましたが、3年生にインタビューというのがあって、うちの孫は私のところにインタビューに来たから何だと思ったら、3年生はこの教科書を使っていたのですね。インタビュー。それぞれいろいろ各変化があっておもしろいのですが、私は光村、あるいは教育出版、光村は文学的な感じがして、教育出版というのは実習的というか、実学的というか、レベルが高いです。どちらでも、この2つの中から選ばれるといいと思います。

○【佐藤委員長】 ありがとうございます。ほかにご意見ございますでしょうか。

中村委員。

○【中村委員】 私も光村か教育出版がいいと思いました。どちらかといったらやはり光村かなと思ったのは、読み物の教材が多いことと、それから「『平和』について考える」とか、3年生の「ちいちゃんのかげおくり」などの教材があることです。光村を国立ではずっと使っていると思うのですが、そうすると大学生になったうちの子どもたちも同じものを読んでいて、何か懐かしい気がしましたし、安心できる感じもします。

それから、審議会の報告にも指摘されていたのですが、詩のページに挿絵がなく言葉からイメージを持ちやすくなっているというのが、非常にこれは見識ではないかと思います。このごろの教科書は挿絵とか写真とかイメージが豊富ですが、それが言葉から本当に自分の頭の中で想像するというのを助ける場合と邪魔する場合があると思うのです。特に詩は、自分なりの情景をたくさん思い描くことが大切で、そのときに光村は、ほかのところでは挿絵が多いのに、詩のところでは使っていないというこの方針というのが、さすがだなと思いました。

教材は、これもあればいい、どれもあればいいと言うとどんどん大きな本になってしまうかもしれませんが、3年生で韓国の民話の「さんねんとうげ」を入れていることもとてもいいと思いました。6年生では高畑勲さんというアニメ監督の方が、「『鳥獣戯画』を読む」という文章を書いています。日本の伝統を受け継ぎながら、今この時代に現役でアニメをつくっていらっしゃる方が「鳥獣戯画」をどう読んでいるのかという、これは非常にいい着眼点だと思いました。

教育出版は、いわさきちひろの表紙だったものですから、第一印象で非常にすてきななと思いました。もちろん中身が大事ですから、それが決定打になるわけではありません。先ほど嵐山委員もおっしゃったように、物語とか詩が光村図書はやはり老舗という感じがするのですが、教育出版は自然観察とか、そういうところに重点が置かれているように思いました。

あとは、ことし初めて教科書を出した三省堂が、やはりいろいろ工夫をしているところに注目しました。例えば「あの作家はこんな字を」というコーナーで、作家が肉筆でどういう原稿を書いていたかを見せています。私たちは本では活字しか見ないので、作家の方たちが肉筆でこんな字を書いてこの作品が生まれたという想像を子どもたちができるというのはすてきななと思いましたし、市民アンケートの中にもあったのですが、猿橋さんという日本の重要な女性科学者の文章が入っていて、そういうところでも非常に注目をしました。

私は光村か教育出版かといったときに、現場の先生方が「今までずっと同じ教科書をやっているか

ら違うのをやってみたい」という気持ちがあれば教育出版だし、「同じほうが今までの教材研究の蓄積があるのでよい」ということであれば光村かなというふうに思いました。私も教える仕事をしてますけれども、もしも自分ではなくどこかで別の人が選んだ教科書をずっと使うとしたら、嫌になったりしないかと思ったのですけれども、それはこの前、審議会のご報告のときに先生方の意見も伺ったときに、調査研究委員会でも「やはりそれなりの蓄積があるし、光村がいい」という意見だったということです。結論として、私は光村がいいのではないかと思います。

○【佐藤委員長】 ありがとうございます。私も国語について意見を申し上げます。

いろいろな教科書を何度か読ませていただいて、最終的に光村図書を推薦したいと思います。国語の学習において優れた文章に多く触れ、その背景や心情、また、意図するところを読み取るということは極めて大切であると思っています。光村図書は、説明文、意見文、また、文学作品など以前から教科書に使われることの多い、いわゆる定評のある著作に加えて、比較的新しい作品も取り入れていました。

また、作家や作品、それから伝統的な言語文化に関しても、子どもたちの興味、関心や理解を深める工夫が見られたと思います。先ほど中村委員から「鳥獣戯画」を取り上げた際に、高畑勲さんの文章を紹介していたというお話がありました。やはり同じように6年生で狂言「柿山伏」を取り上げたところでは、その前に万葉集や伝承文学から古典芸能までを「伝えられてきたもの」として紹介し、また、「柿山伏」を取り上げた後で、狂言、また、「柿山伏」についての狂言師の書かれた文章を紹介していました。また、宮沢賢治の作品の後にも、資料として宮沢賢治の生立ちや心情を記した「イーハトーヴの夢」と題する小説家の作品を取り上げていました。このように作品をととても大切に扱っている印象を受けました。

それから米田委員から「季節の言葉」についてお話がありましたけれども、私も同感です。また、光村図書は、「季節の言葉」以外にも随所に言葉に注目した単元があり、また、巻末にも思ったことや感じたことをあらかず言葉、物事や考えをつなぐ言葉などがあり、発達段階において語彙をふやす工夫が見られました。

それから中村委員が「詩を扱う単元に関して、挿絵がなくイメージを膨らませる工夫が見られる」とおっしゃいましたが、私も同感です。言葉を単なる知識としてふやしていくというだけではなくて、例えば季節感を味わったり言葉の持つイメージを膨らませたりと、感性を豊かに育てながら日本独特の言語文化に触れ楽しむという非常に質の高いものを目指していると感じました。

また、読書案内も非常に充実していたと思います。巻末の「この本、読もう」、それから単元末にはその教材のジャンルに属する本、例えば昔話や短編集、科学読み物や植物に関する本など多くのジャンルが複数紹介されていました。また、いずれも実際の本の写真がありました。また、教材の最後には、作者のほかの作品も紹介されていた点もとてもいいと思いました。

また、教育出版は、特に随筆の扱いに特徴があると思いましたが、「漢字の広場」でもいろいろな角度から漢字を学習するという点が非常におもしろいと思いました。

今、各委員からのお話を伺いました。米田委員からは光村図書、中村委員は光村図書と教育出版、嵐山委員からも光村図書と教育出版、どちらかといえば光村出版を押したいというお話でした。

委員の皆様のお話を総合いたしまして、光村図書を採択することよろしいでしょうか。

(「はい」と呼ぶ者あり)

○【佐藤委員長】 それでは、国語は光村図書を採択することといたします。

続きまして、書写に移ります。

書写につきまして、皆さんのご意見をお願いいたします。

嵐山委員。

○【嵐山委員】 書写というのは、国語と連動するのでしょうか。そういうことと言えば光村図書、同じのいいという、ただそれだけですが、いいという気がいたします。

東書もちょっと3年生で「夕日がせなかをおしてくる」という阪田寛夫さん、僕の好きな人が出ているので気を引かれました。落語の「じゅげむ」が出てきたり、国語を光村図書にしたら書写も光村図書がいいと思います。

○【佐藤委員長】 ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。

米田委員。

○【米田委員】 私も基本的に書写と国語は連動していたほうが先生たちの指導がしやすいということで、光村図書でいいと思います。光村図書を拝見すると、例えば最初のスタートになります筆の持ち方が非常に詳しいというような特徴がありますし、あと書き初め用のお手本が大きくて、そして使いやすいというところが光村の特徴であるというふうに思います。

今、嵐山委員から東京書籍も捨てがたいというお話もありました。これが連動して選ぶということであれば、確かに東京書籍は、姿勢とか、それも「あしぺた びん とん」などという子どもが覚えやすいような言い方で姿勢を気をつけていますし、あと教科書に手の大きさがそのまま載っているので、かなりそれも利用しやすい。それから毛筆の基本である「とめ」とか「はらい」とか「まがり」「おれ」「おりかえし」ということを意識的に記述しているということがありました。それと「できたよ！しいる（シール）」みたいに、下級生の場合にはうまくできたら、しいる（シール）を張るなどというのがやっぱり動機づけになっていて、楽しく勉強できるかなというふうに思いました。あと筆順を色で示してあるというのも、子どもが興味を持って筆順ということに気をつける、そういうことがあると思いました。

非常にこれと思ったのは、毛筆で書いた場合の悪い例がちゃんと載っているのです。いい例、お手本、そしてうまくできたというのを載せるだけではなくて、悪い例が示してあるというのは、こう書いてはいけないのだとか、こういうところを気をつけなければいけないのだというふうなことを気づかせるには非常にいいことかなというふうに思いました。ただし、連動するということなので、光村図書ということでもいいと思います。

○【佐藤委員長】 ほかにいかがでしょうか。

中村委員。

○【中村委員】 私も、国語の教科書と書写の教科書が一緒の出版社のほうが各単元が結びついていいということだったので、それでいいと思うのですが、幾つか書写の教科書を見て気がついたことを申し上げさせていただきます。

審議会の報告でも、教科書に登場するキャラクターの役割については肯定的に受けとめるという指摘があったのですが、キャラクターがどのような性格を持ったものとして登場するかというのは、やはり考えるべきところがあると思います。全体を通じてでもあるのですが、書写の場合には、学校図書で「えんぴつはかせ」と「筆はかせ（筆博士）」というのが出てきて、それがどう見てもやはり男性の年配の感じのキャラクターでえんぴつと筆が描かれています。日本文教出版の書写も、おじいさんパンダが出てきます。白いひげであるとか白い眉毛であるとか、そういうおじいさん博士

風のキャラクターが学習を導くというようなテキストが国語以外にも見られます。そのところは、必ずしもそうではなくてもいいのではないかと。繰り返しいろいろな教科書でおじいさんキャラが学習を導くというのは、固定観念を助長するのではないかとという恐れがあると思います。

もう1つ、三省堂は、いろいろな動物が出てくるのですけれども、1年生はイヌが男の子でネコが女の子のキャラクターになっています。2年生では、クマが男の子でウサギが女の子になっています。何となくたくましいとか力強いという感じの動物が男の子の服を着ていて、おとなしいとか優しいという感じの動物が女の子の服を着て登場するという、それも何か男女のイメージを固定するような感じがします。ささいなことかもしれませんが、でも実はささいではないのではないかと、そういうところを書写を見て感じました。

光村は、ペンギンが時々登場して、「そっとね」とか「ゆっくりね」とか言っていることに好感を持ちました。

以上です。

○【佐藤委員長】 ありがとうございます。私も感想を申し上げます。

光村図書のよさは、書くときの姿勢や用具の持ち方、それから使い方、点画にかかわること、また、毛筆への導入も硬筆と毛筆の筆の持ち方や筆の角度、それからひじの位置などを比較できるように具体的な例が挙げられていました。基礎的なことがとても具体的で丁寧であると思いました。また、実際の学習や日常生活に生かせるということが書写においてとても大切だと思いますけれども、その言語活動例が多く取り入れられておりました。

構成、系統性等を考えると、書写は国語と同一会社が使用しやすいのではということで皆様から光村図書を推薦していただきました。また、東京書籍のよさについても触れていただきました。また、各社のキャラクターについてもご意見が出ました。皆様のご意見を総合いたしまして、書写については光村図書を採択することによろしいでしょうか。

(「はい」と呼ぶ者あり)

○【佐藤委員長】 それでは、書写は光村図書を採択することといたします。

続いて、社会に進ませていただきます。

皆様のご意見をお願いいたします。

米田委員。

○【米田委員】 それでは、社会、主に6年生の歴史に関する教科書を中心に拝見しましたので、そのことを中心にお話しいたします。

まず推薦する教科書としては、教育出版の教科書ということになります。教育出版の教科書のまず一番いいところというのは、歴史に関しては、どういうところを考えるかということが一番最初にちゃんと明記してあります。「いつ、どこで、だれが、なぜ」ということを考えながら勉強するのだという、一応基本ですけれども、それを押さえているということが非常に歴史の勉強のスタートとしていいと思いました。

さらに、教科書の記述として、例えば大きな時代、武士の時代とか、さらには近現代とかいう場合の大まかな章の一番初めに、その時代をあらわすようなエピソードを中心に、その時代を大まかに外観させた上で、そして、じゃあ、その時代はどういったことがあったのかという形で細かい記述が始まっているということで、児童の興味、関心を最初に引き出している、そういう工夫がなされているというふうに思いました。



あと各章ごとのまとめが教科書にきちんと記入させるようになっていて、それを記入すると、その章の一番基本的なこと、基礎的なことが身につくという、そういう工夫がありました。

さらに、全体的に資料とか図版、グラフ、それから聞き書き、そういう一番歴史の基礎になるようなものを読み取る、そういう力を育てる、そういう手立てが非常によいと思いました。

それと、かなり最近の研究の成果、歴史の研究の成果をいち早く取り入れているということが好感が持てました。例えば江戸時代の鎖国に関して、鎖国の中で4つの窓口があったのだというようなこととか、江戸のまちのいわゆるリサイクル、エコというようなことも書いてあります。

それと近現代の問題ですが、それに関しては、特に一般の人々の動き、そういったものを詳しく書いてあるというところがありました。自由民権運動ですとか水平社の記述とか、そういったものが非常に丁寧に、単に歴史が一部の支配者が政治を行うわけではなくて、民衆の力が強いのだというようなことを自然に感じさせる、そういう記述が近代の場合には非常に目立ちました。

さらに、子どもへの関心ということで、「歴史新聞」とか「歴史かるた」とか、あと非常に詳しい囲みの記述、さらにはオオサンショウウオがキャラクターになっているのですけれども、「広げ深める」という、そういう囲みでさらに基礎・基本から発展へという、そういう児童の関心を深めやすい、そういう工夫があるという、発展的なそういう記述が非常に多かったと思います。

あと教科書を細かく見ますと、各章、さらに各節の頭のところに、どういったことを考えるかということ、児童の問題意識を喚起するような一言が必ず入っている。「こういうことを考えてみよう」とか、そういったことが非常に細かいところですが、その章を始めるに当たっての心構えになるなというふうに思います。

全体に記述のことに関して言いますと、歴史の場合には子どもたちがまだ習っていない漢字、人名ですとか地名ですとか事件名ですとか、そういったものがたくさんありますが、それをあえて平仮名で書かずに漢字で書いて、そしてルビを振ってあるという、そういう記述もよいと思いました。

以上、教育出版のよさということでお話ししましたが、歴史の勉強の場合には、例えば東京書籍などもいわゆる問題解決的な構成というようなことを意識していて、さらにそういう子どもの興味、関心に基づいて、そして学習を進めていくという工夫が各社非常に意識的に行われていたというふうに思います。

あと日本文教出版の場合には、非常に大判などの場合には詳しいのですけれども、たまたま取り上げている地域が九州であったりとか、主に西のほう、堺市であったりとか、そういう地域的に考えると、かなり西のほうの学校には適するけれども、東のほうの学校には少し興味、関心が薄れるかなというようなことがありました。

あと歴史以外の教育出版のよさとしては、やはり地域の取り上げる問題みたいなものが比較的東のほうに中心になっていて、興味、関心が持ちやすい。事例で取り上げる地域性みたいなものも国立には合っているのかなというふうに思いました。

以上です。

○【佐藤委員長】 ほかにいかがでしょうか。

嵐山委員。

○【嵐山委員】 ほぼ同じです。東京書籍は、ドラえもんでしょう。のび太とかドラえもんとかあまり私は趣味に合わない。でも、よくできている。

いいのは教育出版だと思います。「さくいん」がついているから、各項目の「さくいん」がついて

いる。「さくいん」で調べるということはとても頭を使うし、教育上いいのですよね。本でも何でも「さくいん」をつくるというのはすごく大変で、「さくいん」がある本とない本で格が違ってしまいうわけで、それだけでも教育出版のほうがいいというふうに思いました。

以上です。

○【佐藤委員長】 ありがとうございます。ほかにいかがでしょうか。

中村委員。

○【中村委員】 私も社会科は教育出版がいいと思います。今、嵐山委員がおっしゃったように、「さくいん」があることに私も注目しました。

それから、歴史の内容については米田委員が詳しくおっしゃったので、体裁について言いたいのですが、見開きページが多くて見やすいのと、それからこれは教育出版だけだったのですが、教科書の右ページの端に縄文、弥生とずっと時代が縦に書いてあって、今やっているところはどこなのかということが、色で示されているのが非常によい工夫だと思いました。

もしかしたらほかにもあったかもしれないのですが、「子どもの権利条約」を取り上げていることとか、あるいは国旗と国歌を取り上げるにしても、南アフリカの旗が歴史的にどのような意味を込めてどう変わってきたかが書いてあり、旗というものが歴史的な意味があってつくられて変化をするものであることがきちんと書かれているところがいいと思いました。

それから、教育出版では社会科の学び方が非常に詳しく示されていて、「つかむ」というのが計画を立てる、そして、予想する、調べる、やってみる、考える、表現する、表現し合う、振り返るということが内容とともによく生かされて使われていると思います。「調べ学習」に重点があるような感じをうけるのですが、グラフなど結果のまとめ方についても丁寧なインストラクションがあると思いました。

先ほどから申し上げているキャラクターとかジェンダー問題について、実は一番問題がなかったのが教育出版です。オオサンショウウオが使われていますが、そういう動物のキャラクターを使うと、服を着せたり、おじいさん博士にしない限り男女がはっきりしないという点がまず、いいということです。その点についてさらに言うと、子どもたちと一緒に学習を進めるキャラクターとして、社会科にはほとんどどの教科書にも同学年の男の子と女の子が出てきます。日本文教出版では3年生の教科書に4人のキャラクターが出てきますが、それぞれの性格を見ると、みなさんという女の子は「いろいろなことを知りたいし見てみたいな」と初めに言っています。たろうさんは「考えることが得意だよ」と言っています。女の子のみなさんは「写真やしりょうを見るのがすきな」、「知っていることやわかっていることをつたえるよ」ということです。それぞれのキャラクターがはっきりするというのは、1年間一緒に学習を進めるにあたって、いろいろな見方があることと、この子はこういうところからアプローチするというのがわかることはいい点かもしれませんが、どうも、「そこまでこだわるのか」と言われるかもしれませんが、女の子は「知りたいな」「見たいな」「すきな」と言っているのです。興味、関心のところで発言をしています。男の子は、考えること、伝えることという、分析的、総括的なところで発言します。そういうキャラクターと1年間ともにいるということは、やはりどうなのだろうかという気持ちがします。

それから同じ日本文教出版ですが、キャラクターの使い方で、5年生の下で学習サポートをするのが中年の男の先生なのですが、全く同じ絵が6年生の上巻では旅行会社の人として出てきたり、どこかの所長さんとしても同じ絵がまた使われてたりして、そここのところは出版社としてはちょっと配慮

が足りないのかなと思いました。

表紙は、日本文教出版のもう1つの大判のほうは、出てくる大人がみんな男です。日本文教出版は大判と小さいほうと2つあるのですが、小さいほうの登場人物が圧倒的に男が多いのです。女の人が出てくるのは近所のおばさんと神戸市に住む外国の人、「陶の里」という陶磁器で村おこしをしているところの女の人です。そして、エコロジーの工夫のところ、ごみの分別を一生懸命しているのがお母さんと女の子です。それから「水をとめて食器を洗います」と言っているのはお母さんです。一方で、清掃工場とか市役所とかリサイクル工場で働いている人は男です。現状がそうかもしれないけれども、やはり性別役割分担にとらわれず、男の人も女の人もさまざまな分野でそれぞれ活躍する男女共同参画ということを考えた場合には、小学校の教科書でどういう絵を見せるか、どういうキャラクターがどういう役割をするかということは、実は無視してはいけないことだと思っています。

東京書籍の学習ガイダンスのキャラが、今度は「せんじい」と言う仙人のおじいさんで、これも長老キャラです。一つ一つは小さいことかもしれませんが、全体的に長老キャラは知恵の人という、これはやはり考え直していただきたいところだと思っています。

以上です。

○【佐藤委員長】 ありがとうございます。私も感想を申し上げます。

教育出版、東京書籍、いずれもA B版で資料も見やすく効果的でした。また、調べ学習を進めてまとめるという問題解決的な流れがありました。その際、調べる計画を立てたり予想したり、また、考えたことや感想などを話し合ったり発表し合うなど、言語活動を重視して全体的によくまとめられている教科書という印象を持ちました。

東京書籍では、学び方コーナー、教育出版では学びの手引きという問題解決的な学習において非常に大切なことも記されておりました。

最終的に1社に絞った場合に推薦をしたいのは、教育出版です。理由は、調べる前に、つまり学習課題に対して興味を持ったこと、疑問に思ったことをもとに進めていました。それから資料の扱いが非常に丁寧でわかりやすいと思いました。また、「めあて」を含めた学習の流れ、また、吹き出しも「疑問」や「気づき」など学習を進めるに当って効果的でほどよいものではないかと考えました。それから「伝え合う」というのがありまして、まとめたり発表するなどの場が徹底しており、そこから子どもたちが学ぶことも多いのではと思いました。また、皆さんおっしゃったように、「さくいん」も充実していたと思います。

中村委員が歴史の単元の初めのページの年表というのでしょうか、時代区分のお話が出まして、私もそこに目がとまりました。子どもたちが学習している時代を確認しながら、その単元を学ぶということは、その背景を意識しながら歴史上の出来事を流れの中でとらえていくことができるということだと思います。それは、歴史の学習においてとても大切なことだと考えました。

また、審議結果の報告の中に、全学年を通して必要に応じて学習するところと選択して学習するところがあり、実情に合わせて無理なく学習することができる内容であると記してあります。その点は実際に授業を進めていく上でとても大きいのではと考え、教育出版を最終的に推薦したいと思います。

いろいろな視点からご意見をいただきましたが、皆様からは教育出版を推薦していただきました。社会につきましては、教育出版を採択することによろしいでしょうか。

(「はい」と呼ぶ者あり)

○【佐藤委員長】 それでは、社会は教育出版を採択することといたします。

中村委員。

○【中村委員】 補足、いいでしょうか。先ほど「日本文教出版がとてもひどい」ということを言ったのですが、2点だけ補足します。

日本文教出版がジェンダーを全然意識していないわけではなくて、学習サポート役が5年生の下で中年の男の先生だったのが、6年の上では中年の女の先生に交代しています。それから6年生で女性の職場進出を扱うときに、運転手さんに女性が登場しています。その点はちゃんと意識されて取り組まれているということをおっしゃらず「文教出版が全然ひどい」という言い方をしてしまいましたので、これは訂正をいたします。

以上です。

○【佐藤委員長】 では、続いて地図に移りたいと思います。

皆様からのご意見をお願いいたします。

嵐山委員。

○【嵐山委員】 地図は昔から帝国書院です。それだけです。やっぱり東京都の地図も大きく出ているし、帝国書院は地図でやってきている出版社ですから、大人の地図も帝国書院、子どもも帝国書院で問題ないという気がいたします。帝国書院はちゃんと国後、択捉を日本領土に入れているでしょう。地図の中に北方領土も入っているのです。

○【佐藤委員長】 嵐山委員からは帝国書院を推薦していただきました。ほかにご意見はいかがでしょうか。

米田委員。

○【米田委員】 今、嵐山委員からも「地図は帝国書院」とおっしゃられましたけれども、私もそういう同じ思いです。地図の専門の出版社ということで、一番いいのは圧倒的に地図が大きく、その中に入っている情報量が多いということがあります。単に地理的な情報だけではなく、歴史的な由緒のあるところとか事件が起きたところとか、そういったことも地図の中に入っていて、社会科全体の地図として利用ができるということがあります。それと地図を読む約束ということが一番最初に、方向とか距離とか土地の高さとか地図記号とか、そういったものをしっかり最初に押さえた上で大きな地図をたくさん載せているということがあります。

それとこれは審議委員の先生方から教わったのですが、今回はいわゆる世界の地理ということも教科の中に入っていますので、世界地理の扱いというものも重要で、その際に世界地理を例えばアメリカ大陸などを出した場合に、その同じページのところに日本は同じ緯度のところ、そして大きさも同じ大きさで非常に比較ができるという、あちこちに日本地図を世界の地域のところに加えて書いてあるというのは、子どもに世界の中で日本というのはどういう土地の広さなのかとか、緯度はどうかとかいうことを意識させるのに非常に工夫があるという、そういうお話をいただきましたので、そういう点も世界地図との関連においても、非常に工夫が新しくなされているということで帝国書院ということで推薦いたします。

○【佐藤委員長】 ほかにご意見はいかがでしょうか。

中村委員。

○【中村委員】 私も結論は同じです。帝国書院がいいと思いました。今、米田委員がおっしゃったように、同緯度の日本が世界の各地域の地図に書かれているのを見ていて非常におもしろくて、日本はこのくらい大きさだとか、ヨーロッパの各国と比べると結構日本というのは大きかったのだと思

ったりとか、そういうことを感じました。南半球の地図については、日本が逆さまに入っていて、それも同じ気候というか、北極から南極から同緯度ということで、非常におもしろいと思いました。

東京書籍もいろいろと資料を豊富に入れたりして工夫をされていると思うのですが、それがちょっと地図帳としてはあだになっているというか、ページを開くと地図に割いている場所は少なくなっています。小学校の高学年では教科書があり、地図帳があつて、資料集なども使うと思うので、地図帳としては資料がたくさん入っていることが必ずしもメリットにはならないということです。地図帳として使うとすれば、見やすさの点からいっても帝国書院の地図帳がいいと思いました。

○【佐藤委員長】 私も、地図帳としての活用ということを考えて帝国書院を推薦したいと思います。今、各委員からお話がありましたように、内容や構成にさまざまな工夫がありました。また、よく整理をされていて学習に活用しやすいと思いました。また、地図によって縮尺が統一されているので、面積や距離、位置関係など比較しやすいと思いました。また、文字の大きさや色使い、それから地図の色合いなど、全体的に非常に見やすい印象を受けました。また、資料も日本の全体像、それから日本と世界の結びつきがとらえやすく、世界の国別の統計なども充実して、索引も非常に見やすいと思いました。

ただいま皆様のご意見をお伺いいたしまして、各委員から帝国書院を推薦していただきました。

それでは、地図につきましては、帝国書院を採択するというところでよろしいでしょうか。

(「はい」と呼ぶ者あり)

○【佐藤委員長】 それでは、地図は帝国書院を採択することにいたします。

続いて、算数に進ませていただきます。

皆様のご意見をお願いいたします。

米田委員。

○【米田委員】 算数に関しては、現在でも国立で使っております東京書籍を推薦いたします。理由としては、すべての子どもの、力のある子も少しおくらしている子ということも含めて、すべての子どもの算数の課題、算数的課題、そういうことを考えて、算数的活動が非常に充実している。そして1年生の導入などでも、一番最初の数の導入のところで、おはじきとかブロックとか、そういう具体的なもので丁寧に数の概念を教えている。さらに、絵や図、写真がたくさんあつて、児童が理解しやすい、そういう工夫がなされているということがあります。そして中学年、高学年になってきますと補充問題が末尾にありまして、かなり応用、発展の力は末尾の補充問題で発展させるようになっていくということがあります。

今、国立市では、児童の習熟別授業ということが行われておりますけれども、1つの教科書の中に、発展コースの人はこれをやるけれども、そうではない子たちはやらないみたいな形で、1つの教科書のページの中にこのページとこのページがやらないというふうなものは、それをやれない子どもにとっては大変抵抗があるかなということが考えられます。それが末尾に全部まとめてあるということで、それはそういう子どもたちにとっても劣等感を与えることなく、発展コースの子たちは、さらに力をつけられるという、そういう工夫がなされているかなというふうに思います。

あと国立の小学校の中学年、高学年では今、算数の研究授業などを見ますと、数直線を子どもたちがいかに自分で書けるようになるかということが大変大きな問題として、前回七小の算数の研究授業などもなされていて、その数直線の考え方、それがテープなどを使いましてわかりやすく工夫しているということがあります。

さらに、これはアンケートの中にあっただのですが、発問のページにそのまますぐ答えがなくて、次のページ、さらにはその次のページにあるので、子どもたちが自分で考えられる、そういう工夫がなされているという、そういうアンケートに記述がありましたので、それも非常に大きなことかなというふうに思います。

そして、これは審議会の先生たちがおっしゃっていたある意味非常に決定的な理由として、課題を子どもたちが考える。児童の主体性を重視した教科書、そしてそれが今、国立で行っている授業改善につながる、そういうのに資する教科書であるという、そういう全体的な説明をしていただいて、それはやはり今、国立が採用する教科書としては一番だろうというふうに思いました。

以上です。

○【佐藤委員長】 米田委員から東京書籍を推薦していただきました。ほかにご意見いかがでしょうか。

中村委員。

○【中村委員】 私も東京書籍が全体的にバランスもよく、練習問題も先ほど米田委員がおっしゃったように、補充の問題が巻末にまとめられているというところがいいと思いました。

新聞等でも話題になった学校図書は、バンダイと組んでゲームのキャラクターが学習の案内をしたり、学年の最後に問題を解いて希望のかぎとか友情のかぎとかを手に入れるという、そういう仕掛けは、ちょっとは子どもたちにおもしろいかもしれないけれども、それで教科書を決めるものではないし、むしろ私はそういうことをしないでつくってもらったほうがよかったかなと思います。かぎを手に入れる問題が優しい問題であるにしても、もし解けなくて希望とか友情とかのかぎをとるところまでいかなかった子どもがいたとしたら、そしてそれを真面目にうけとめてしまう子どもがいたら、本当にかわいそうなことになるのではないか。これが本当に子どものためを思った仕掛けかどうかというところに疑問が残ります。

それから気になったことが幾つかあるのですけれども、日本文教出版の算数の教科書で、昔のことに子どもたちに興味を持ってもらうという工夫だとは思いますが、3年生の上巻で「昔の人がおぼえた九九です」という表があり、4年生の下巻では「昔の時刻の教え方」というのがありました。詳しく限定する必要はないにしても、その昔というのはいつなのかということで、明治時代のおじいさん、おばあさんなのか、江戸時代なのか、「昔の」というのはあまりにも雑ではないかと思いました。そして、教育出版の4年生の下巻でお料理の挿絵がありますが、母と娘です。これも考え直してほしいと思います。

以上です。

○【佐藤委員長】 ほかにご意見ございますでしょうか。

嵐山委員。

○【嵐山委員】 私は東京書籍、問題を解決するノウハウが一番よくできていると思いました。「おもしろ問題にチャレンジ!」とか、ほかでもやっているのだけれども。算数はやっぱり難しい、ついてこれる子とついてこれない子があるから。「算数おもしろ問題」とか「算数おもしろ旅行」とか、学校の先生の能力、キャラクターにもよるけれども、算数は苦手だという子も多いでしょう。そういうお話とか、おもしろ問題、そういうものを入れて子どもたちの興味を引く方向に持っていくと算数がとてもおもしろくなる。そういう面でも東京書籍の「新しい算数」がいいと思います。

○【佐藤委員長】 ありがとうございます。

私は、東京書籍と学校図書に絞ってもう一度読み直しをしてみました。最終的に東京書籍を推薦したいと思います。理由は、問題を解いていく過程が非常に丁寧でわかりやすいと思いました。また、各委員がおっしゃっていましたが、基礎・基本をしっかり押さえている教科書であると思いました。また、問題を解いた後で必ず例題を複数解いて、確認をして、それから練習問題、力をつける問題、さらに仕上げの問題へと進んでいました。量はさほど多くありませんでしたが、段階を踏んで精撰された問題であるという印象を受けました。

また、他の委員もおっしゃっていましたが、巻末に補充の問題がありました。答えがついていますので自分のペースで学習ができるよさがあると思いました。

また、米田委員からもさまざまお話がありましたが、審議結果の報告書に「様々な図について一貫した表記がされていて、児童がどんな図を書けるようになればよいか分かる。それから絵や図、写真が多くあり、児童が問題場面を把握しやすい構成になっている」とありました。これは先日、学力テストの結果が公表された際に、「算数の基礎力、あるいは数学的な概念を身につけることに課題があるのでは」という指摘がある中で、非常に大事な視点ではないかと思います。

また、東京書籍には、答えを求めるのにまず自分が考える。それからほかの人が見てもわかるように書きあらわす。1つ考えたらほかのやり方も考える。また、友だちの考え方も聞く。その上で話し合っけてまとめて確かめるという流れがありました。自分の考えを書きあらわす。また、友だちの考えを読み取る。それをお互いに伝え合うといった言語活動の場面も設定されていました。先日の学力テストの公表に際して、算数において、これは国語についても同じだと思いますけれども、「筋道立てて考え表現する力、相手がわかるように説明する力に課題がある」という指摘があります。

審議結果の報告書に、「東京書籍は算数的な活動を取り入れた問題が数多くある」とありました。この算数的な活動を通して筋道立てて考え表現する力、相手がわかるように説明する力を身につけていくと思いますので、ぜひこの力を伸ばすために教科書をうまく使っていただきたいと思います。

また、東京書籍には随所に「おぼえているかな？」という欄がありまして、既習のこれは非常に基礎・基本の問題ですけれども、チェックできる復習のページがありました。それから「算数のおはなし」というコーナーで、興味や関心を育て、また、「算数をつかって やってみよう」というコーナーで、実際に学習したことを生活に生かす、結びつけるというところが非常にいいと思いました。

各委員のご意見が東京書籍を推薦したいということですので、算数につきましては東京書籍を採択することよろしいでしょうか。

(「はい」と呼ぶ者あり)

○【佐藤委員長】 それでは、算数は東京書籍を採択することといたします。

続いて、理科に移ります。

皆様のご意見を伺いたいと思います。

嵐山委員、お願いします。

○【嵐山委員】 理科は苦手で、自分が勉強するのだったらどれがいいかなと思って、教育出版の「地球となかよし」、これは多摩川、5年生の多摩川の上流や下流の違いがあって、それぞれみんなよくできていますが、国立の小学生が理科を勉強するにはこれがいいと思います。

以上です。

○【佐藤委員長】 ありがとうございます。嵐山委員から教育出版を推薦しますというご意見をいただきました。ほかのご意見はいかがでしょうか。

米田委員。

○【米田委員】 私も教育出版を推薦いたします。一番最初の理科の学習ということで、どういう形で物事を考えていくかということに「学習のステップ」という欄がありまして、最初に「?」、疑問を持つ。そして予想を調べる。そしてそれをどう利用するか。そしてそれを自分で本当にわかったかどうかを確かめるという、そういう問題解決的な学習の流れが非常にはっきりしているというところがあります。

国立でも第五小学校で「くにごメソッド」という形で、科学的リテラシーを高める、そういう指導法を積み重ねて教えていらっしゃるけれども、やっぱりそれに通じる理科的ものの発想、それから実験、そしてそれをきちっと實際生活に生かすというような、そういう流れが非常に子どもたちに定着できるような編集になっていると思います。

そして、植物とか、そういったことに関しては、観察カードというのが、それが非常に詳しく例が書いてあるという、子どもがそれを読んでどう書けばいいのかということが非常によくわかる、そういう記述もあります。

それから今、嵐山委員がおっしゃったように、「流れる水のはたらき」というところでは多摩川が取り上げられている。それ以外、地域の資料として、グリーンカーテンということでは杉並が取り上げられている。それから里山について、最近ではビオトープという、そういう地域の注目というのが集まっていますけれども、それが府中が例になっているということで、それも地域性ということ考えた場合に、子どもの興味、関心がわく、そういう配慮があるというふうに思います。

理科の場合には、実験の場合には非常に安全面の配慮ということが大事ですが、アルコールランプとか実験器具への使い方ということに関しても、非常に詳しく説明があるというところがあります。あと最後に、理科的な言葉ということで「言葉のひろば」という用語が最後にまとめられていて、非常にわかりやすいということもあります。あと「星座早見作成シート」というのが付録の中にありまして、家に帰ってシートを使って夏休みでも家庭学習のときに使えるとか、そういう可能性ということもありました。

私は、今、教育出版のことをお話ししましたが、今まで国立で使っていました大日本出版という本もよく詳しく拝見させていただきました。かなり内容が豊富、かなり難解な言葉で書いてあるという、それは情報としてたくさんあるわけですが、それが子どもの発達段階によって使いこなせるかということ、ちょっと無理があるというような感じがいたしました。

それと実験のやり方の中で、ホウ酸を使うということがかなり危険で、同じものならほかのものでできたほうがいいという、危険であるという、そういったことは非常に大きな問題ですので、それはやはりまずいかなというふうに思います。

理科の教科書は、課題学習というか、そういった問題意識を持って学習をするという配慮がどの教科書もかなり意識して取り上げられているということがありますが、その中でも先生たちが指導を安心してできるという評価のある教育出版の教科書がふさわしいのであるかなというふうに思いました。

以上です。

○【佐藤委員長】 米田委員から理科は教育出版を推薦いただきました。

中村委員。

○【中村委員】 私も教育出版がいいと思いました。全体を通じて問題解決的な学習という性格が貫かれていたのと、実験器具の使い方や観察の仕方の導きが非常に丁寧だと思いました。



迷ったのは、学校図書もよかったと思ったのです。学校図書は、写真が非常によく、同じアサガオでもメダカでも、他の出版社と比べて非常に見やすくインパクトのある写真で、本当にいい写真を選んでいました。写真ということでは、その後に見た大日本図書と何が違うのかと比べてみたのですけれども、大日本図書はたくさん写真を使っている、丸い形にするなどデザイン的に工夫をしすぎているところがかえって理科の写真としてはインパクトを減らしてしまったのではないかと思います。

また学習キャラですけれども、学校図書は白いひげのおじいさんです。教育出版は「鉄腕アトム」のお茶の水博士で、大日本図書はカエル博士という、これはひげも何もありませんが、やはり博士。そして5年生になるとクマになります。

学校図書で、写真だけでなく、いいなと思ったのは、表紙に科学史上で功績のあった科学者の写真を大きく3人ずつ取り上げていることです。現在の科学が、これまでのさまざまな発見や理論の積み重ねの上にあるということが印象づけられる、とてもいい表紙だと思ったのですが、3年から4学年あるわけで、全部で3人ずつ出しているの全部で12人になります。そのうち女性がキュリー夫人とレイチェル・カーソンの2人です。せめて各教科書の表紙に男2人、女1人くらいにはしてほしいと思います。ほかの教科書でも啓林館ではレイチェル・カーソンを取り上げていて、あとは大日本図書が山崎直子さん、教育出版が向井千秋さんです。もちろん女性の科学者の数が、これまでの男性科学者の数に比べれば少ないことは事実です。だけれども、意図をもって、こういう分野で女性も活躍しているということ子どもたちにぜひ伝えてほしいと思うので、こういうところも今後の課題として、教科書会社の方が受けとめてくれたらと思います。

以上です。

○【佐藤委員長】 私も意見を申し上げます。

次年度より新学習指導要領の全面実施となります。算数もそうですが、理科につきましては、授業時数がふえ扱う単元もふえる中で、身近な生活体験にも目を向けて、子どもたちの興味、関心を大切にしながら、過不足なく学習内容を定着させることが大切であると思います。そのためには、考えを進める過程が丁寧で一貫性があり、大切なことが簡潔にわかりやすくまとめられていることが極めて大切であると考えました。安全面への配慮等の記載も含めまして、教育出版を推薦したいと思います。

もう少し細かく言わせていただくと、教育出版は単元の初めに「学びのとびら」があり、身近な生活体験や自然現象が取り上げられているものが多かったです。また、既習事項についても、何々学年で学んだこととして整理されていました。

それから委員からのお話にも出ましたが、私は観察と実験の2つに主に絞って教科書を読みました。教育出版の観察に関する記述は、米田委員もおっしゃっていましたが、非常に丁寧でした。3年生から単に「観察しよう」「考えて書こう」ではなくて、観察の観点を明確にし、繰り返し指導していました。また、3年生から4年生に移る際には、観察カードに予想や比較を新たに加えていました。また、比較についても、何と比べたらよいか比べる対象がはっきりしていました。また、実験についても、動機づけも無理のない自然な設定が多かったです。例えば閉じ込めた空気と水については、空気鉄砲の仕組みに簡単に触れた後、みんなで空気鉄砲で遊ぶ。その遊んだ中で疑問やつぶやきを拾って次の学習に進めていました。

米田委員、中村委員からは、問題解決的な流れで学習ができるというお話がありましたが、発達段階に応じて観察の視点もふやし、また、問題解決型の学習においても「予想しよう」「計画しよう」

「結果から考えよう」など過程をふやしていました。これは中学校でも非常に大切な力になると思います。このように系統的に考える力を養うことができると思いました。また、結果とあわせて、わかったこと、気づいたことを文章で書くようにしていました。結果から読み取る力、それを表現する力、相手がわかるように説明する力は、先ほど申し上げたように非常に大切な取り組みであると思います。

それからまた、教育出版で非常に注目したのは、「学んだことを使おう」というところです。これは、学習したことを使って身の回りの現象を説明するということです。これは、確かめの問題にも幾つかありました。よく「できる」「わかる」と言いますがけれども、私は「できる」「わかる」というのは、子どもたちが学んだことを生かす場面、確かめる場面を設定することが必要であると思います。そうした意味で、実感を伴った理解、また、理科の楽しさに触れられることが可能ではないかと思っただけで大きなポイントであると思いました。また、ノートを使い方も非常に細かく指導が入っていました。

それから他社の教科書にも少し触れさせていただきますが、学校図書は導入、また、単元末のまとめに工夫がありました。話し合い、考えることを大切にしていると思います。また、各学年で学ぶ単元、それからほかの学年で学ぶ単元が4つ、ジャンルに分けて系統立ててあらわされていました。見通しを持って学ぶことができると思いました。ただ、審議結果の報告書に「実験方法の説明資料が写真ではなく絵が多いため、わかりにくい」とありました。私も写真のほうが正確に伝わるものもあるのではないかと思いますし、イメージを持ちやすいのではと思って少し残念でした。

また、大日本図書は、先ほど実験の安全性というお話がありました。加えまして、吹き出しの効果、それから大切なところ、押さえるべきところの表記を含めた表現にやや課題があるのではないかと思います。

皆様から理科は教育出版を推薦していただきました。理科につきましては、教育出版を採択することですらよろしいでしょうか。

(「はい」と呼ぶ者あり)

○【佐藤委員長】 それでは、理科は教育出版を採択することといたします。

続いて、生活に入りたいと思います。ご意見をお願いいたします。

米田委員。

○【米田委員】 生活は、採択の数が一番教科書の会社が多くて、そしてそれぞれの会社がそれぞれの形で工夫されていて、大変悩む教科書でした。そして結果的に審議会の先生方のお話も伺いながら、最終的に東京書籍というところを推薦させていただきます。

生活科というのは、1年生、2年生が基本的にはいわゆる理科的なこと、それに社会的なこと、さらには家庭科的なこと、それを融合して、それにうまくつながられるようなということで教科書が書かれているというふうに思います。その際に、身の回りの生活、さらには動植物、さらには遊び、季節感、そういったものを子どもが気づいて、そしてそれに対して興味を持つということが非常に重要だろうというふうに思いました。

そういう意味で東京書籍は、児童が興味、関心を持って学習を進めていく単元構成というのが、非常に季節感とか、そういうのも無理なく実際の季節に合わせて展開できるということで、そういう工夫があったというふうに思います。

あと非常に大事なこととしては、安全面についての欄が特にありまして、それを子どもに意識させるというところが、実際いろいろな事件が起きている時代ですので、そういったようなことも非常に

重要な生活科の指導の一環ということで、安全性ということは東京書籍が一番はっきり記述されていたということがあります。

あといろいろな小さな「ポケットずかん」みたいなのが東京書籍は、野菜とか季節感とか、そういうようなことについての図鑑が豊富であるということで、子どもたちが興味を持ってそういったものも取り組めるのではないかなということで東京書籍を推薦いたします。

もう1つ、生活科、ある意味将来の理科とか社会とか、それから家庭科への導入ということではなく、生活科独自の編集方針を持っていたのが光村図書だというふうに思います。非常に子どもの最初は季節感から入りまして、そして遊びとか、さらには、そういう学校での様子とかということが、かなり単元が1つ多くなって、活動の広がりとか深まりとか、そういうことを徹底的に追っていくということでは、生活科ならではの編集方針で、非常にアプローチがおもしろいなというふうに思いました。ただ、1つのそういう章が大きいものですから、単元構成から言うと、実際に審議会の先生がお話しされたところによると、「現場ではちょっと使いにくい教科書である」というような評価が出ているというお話でしたので、東京書籍、単元構成がしっかりなされているということで、あと安全性が確保されているということで推薦いたします。

ただ、本当に光村もおもしろいなというふうに思いました。例えば同じまちの同じ場面の春夏秋冬の絵がかいてありまして、最初はお店の名前が花とか木で隠れていて、それがだんだん秋になると葉っぱが散って、そして冬になるとこれは何々屋さんだというのわかるという、すごく子どもが夢のあるというか、読んでいて楽しい、そういう編集がなされていたので、なかなか大人が見るにもおもしろいかなというふうに思いました。

以上です。

○【佐藤委員長】 米田委員から光村図書のよさと、最終的には東京書籍を推薦いただきました。ほかにご意見いかがでしょうか。

嵐山委員、お願いします。

○【嵐山委員】 感想をいうと、学校図書。野菜のつくり方とおもちゃのつくり方、みんな大体いいです。学校図書と東京書籍がいいと思いました。今、米田委員がおっしゃったように、便利手帳があり、切って使うポケット図鑑がついていた。これは持ち歩いたら便利だろうなという感じです。季節感があるし、だけれど学校図書のほうは重すぎるな。重たい。総合力で東京書籍を推薦いたします。

○【佐藤委員長】 嵐山委員から総合的に東京書籍を推薦していただきました。

中村委員。

○【中村委員】 生活科は、特にどれがだめとかどれがいいということがなかったのですが、結論から言うと、私も東京書籍がバランスがとれていていいと思いました。もう1つは、先ほどから申し上げているジェンダーの問題で、通学路でおまわりさんの挿絵が男のおまわりさんと女のおまわりさんと両方いたのがよかったと思いました。

あとは感想になりますが、「みんなとなかよく」という中に、外国の人というか、日本でもいろいろな地域の出身の子どもたちがいるような現状を踏まえて、例えば学校図書は「いっしょに あそぼう」というところで金髪の女の子がいたり、黒人と思われる男の子がいたり、日本文教出版では、クラスの友だちとして黒人のように見える女の子が出てきたり、挿絵に白人の男の子も出てきたりしています。そういうはっきりとした違いのある子どもを入れようと思うと、何か白人と黒人という感じになってしまうのはちょっとどうかなという気もしますが、意欲としてはさまざまな出身の子どもた

ちを描こうとしているということがわかりました。

アサガオの観察が一番詳しくあったのが学校図書で、学校訪問に行くところの学校でも1年生がアサガオをとて熱心に育てているので、そういう点では学校図書もいかなと思ったのですが、「いえのしごとにちょうせんするよ」というところで、考えているのだろうけれども考えが足りないのではないかなと思ったのが学校図書です。お父さんが花柄の前かけをかけてお皿洗いをしている、それを息子が手伝っているという絵です。いかにもお母さんがいつもやっている仕事をお父さんも手伝っているという感じで、もちろん男性でも花柄の前かけが好きな人はいるかもしれませんが、自分の仕事としてやるとすれば、よそにも着ていけるような自分の好みで選んだエプロンでやるのが普通ではないか。そういう点で言うと、教育出版のお父さんは、縞模様の、お父さんによく似合っているエプロンをして皿洗いをしていました。

あと、学校図書の夕飯を食べている写真が、日本の現状を反映しているのかと思いますが、お母さんと子ども2人で食べています。お父さんはどこに行ったのだろうという、日本の労働の厳しい現実かもしれませんが、それは先生がどのように生かすかという課題かと思いますが。

先ほど社会科では日本文教出版に注文を申しあげましたが、生活科ではお父さんが随分頑張っているというのが日本文教出版です。皿洗い、アイロンがけ、配膳、切れ味を見ると上手でないのかという感じでニンジン切っているのがお父さんです。お父さんが2人の子どもたちの野菜サラダづくりを見ていたりとか、そこでは日本文教出版が随分と工夫と努力をされていると思いました。結論としては、東京書籍が「これは何だ」と思うところが一番少なかったということになります。

もう1つ気になったのは、教育出版です。生活科は身近なところから入り、3年生には理科と社会に発展していくという位置づけだと思うのですが、アサガオを取り上げた中で、「おはなしのじかん」というところに「たねのきもち」というところがありました。種の表情を見て「たねのきもちをおはなししましょう」ということなのですが、生活科とはいえ、後に科学的認識に発展していくような生活科で、種の気持ちを話させるということについては疑問があります。

○【佐藤委員長】 中村委員から、バランスを考えて総合的に東京書籍を推薦していただきました。

私も東京書籍を推薦したいと思います。理由は、東京書籍の教科書は、身近な人々、特に地域の人とのかかわりを多く扱っていました。また、夏、秋、冬と同じ公園のイラストを設定して、咲いている花、木の葉っぱの色、空の色、また、服装や遊びなど四季の違いに気づくことができるようにしていました。

それからしゃぼん玉で遊ぶところでは、「どうしたらせつけんを はやく とかせるかな。」「おおきなしゃぼんだまをつくるには どうしたら いいのかな。」、また、「つちや すなで あそぼう」では磁石を使ったり、水鉄砲では「もっと とおくに とばしたいな。」などの吹き出しがありました。吹き出しを使って素朴な願いや疑問をうまく伝え、科学的な興味につながる楽しさを感じました。また、発表や表現する場を設定しており、話し合いや振り返りを通して伝え合い、交流する活動の例が多く挙げられていました。

また、先ほど委員から安全面についてもお話がありましたが、安全に関する内容も多く取り上げられていましたし、具体的に「なにに きを つければ いいのかな。」「ちがう ことを している 人 さがし」など、子どもたちが考え、気づき、言葉で表現できるようにしていました。

また、ほかの教科書の話になりますが、学校図書もサイズが大きい分、写真やイラストも大きくて見やすかったですが、持ち運びや実際机の上に置いて子どもたちが学ぶ際には、やや扱いづらいので

はないかなと思いました。

また、光村図書に関しましては、安全に関する記述がやや少なかったかなというのと、「つくってあそんで」の作り方が載っていないところが非常に残念でした。ただし、この2社は、先ほど米田委員からお話ありましたが、公園とお店を定点として四季をそれぞれに扱っていたところがとてもすてきだと思いました。特に光村図書のお店のイラストは、お花屋さん、八百屋さん、和菓子屋さんそれぞれに四季がありました。かしわもち、水ようかん、くりようかん、ゆずまんじゅうやおしるこなど、野菜にも旬があり、和菓子にも四季があるということを感じました。そのあたりが生活実感としては、今、極めて薄くなりつつあるのかなと残念に思うと同時に、また、子どもたちを取り巻く環境を改めて感じました。

皆様からのご意見を総合いたしまして、生活につきましては東京書籍を採択することよろしいでしょうか。

(「はい」と呼ぶ者あり)

○【佐藤委員長】 それでは、生活は東京書籍を採択することといたします。

続きまして、音楽についてご意見をお願いいたします。

嵐山委員、お願いします。

○【嵐山委員】 わからないのだけれども、教育出版のタイトルが「音楽のおくりもの」でしょう、教科書名を「音楽のおくりもの」というふうに限定してしまうというのもどうかなという気がいたしました。授業ですから、音楽の一部の部分で「音楽のおくりもの」というのは、言葉としてはいいけれども、教科書のタイトルに「音楽のおくりもの」というと、授業を外れるのではないかな。教育出版はタイトルで疑問を感じます。

東京書籍も「新しい音楽」という、古い音楽はいけないのかと思ってしまう。音楽に形容詞とか価値をつけるときは、教科書名ですから、「新しい音楽」とか「おくりもの」とかいうふうにしないで、例えばその点、教育芸術社は「小学生の音楽」というシンプルな、普通のクールなタイトルですが、教育のスタンスとしては、タイトルとしてはこれがいいと思う。内容はよくわからない。

○【佐藤委員長】 嵐山委員からタイトルなどいろいろな角度から考えて、教育芸術社がよろしいのではないかというご意見をいただきました。ほかのご意見いかがでしょうか。

米田委員。

○【米田委員】 教育芸術社は、やはり音楽に特化した出版社ですので、定評があるということがあります。どういったところが定評があるかというふうに見てみますと、例えばリコーダーとか鍵盤ハーモニカ、そういうところの楽器の扱いが非常に丁寧でわかりやすい編集の工夫がなされているとか、あと1年生から系統的に音楽を身につけさせるということで、最初に「拍」というようなイメージを出させて、そしてそれから今度カスタネットに移るというような始まり方をして、そしてそれをさらに上の学年になるとティンパニーとかそういうのもあるよというような形で、系統性というのが各学年について考えられている。さらに、載っている楽曲も大変多く、特に発展的に学習する楽曲が後ろのほうにまとめられているというところで、先生たちも非常に使いやすいのではないかなというふうに思います。

それと、これは審議会の先生から教えていただいたのですが、1つの楽曲で器楽にも使えるし、歌としても歌えるという、そういう両方できるような楽曲も幾つか入っているというところで、これも音楽の先生たちにとっては非常に教えやすい教科書なのかなというふうに思います。

それと、これも私も音楽に関してはあまり詳しくないですけれども、最後の合唱曲などの場合には、もともとの曲ではなくて非常に美しい編曲がなされている、そういう楽譜が載っているというのは、音楽のある意味すばらしさということ子どもたちに感じさせるということでは、編曲をした曲も載せているということは、非常に音楽の楽譜として使う場合にも発展性があることだなというふうに思いました。

あと音楽の鑑賞という鑑賞曲に関しては、割と定評のある鑑賞曲が多く、低学年だと「小犬のワルツ」とか、そういったものから始まって、そしてだんだんに高学年になるとペール・ギュントの「山の魔王の宮殿にて」とか、そういった新しい曲も載せている。「ハンガリー舞曲」とか「アイネ クライネ ナハトムジーク」というような非常に定番の曲も載せているということで、これをどういう音楽を鑑賞させるかというのは、現場で先生方が判断なさることだろうと思いますけれども、そういう鑑賞に関しても、非常に学年によって、さまざまな発達段階によっていろいろな曲を選んでいるという工夫があるというふうに思いました。

「学年の歌」というのが最初に出ていまして、5年生は「ビリーヴ」という、オーケストラを聞く機会が5年生はありますが、そのときに最後に必ずアンコールでオーケストラの人と一緒に合わせて歌って、しかも国立の5年生はちゃんと二重奏にして歌うという非常に感動的なシーンを去年もことしも見ていますので、ぜひ5年生の初めに「ビリーヴ」が載っているこの教科書はやっぱりいいかなというふうに思いました。最後はちょっと蛇足ですけども、そういうことで教育芸術社の本を推薦いたします。

あとの2社も、それぞれ教芸とは違う自社の特徴を出そうというような努力は見られるということもあります。あと鑑賞曲なども、非常に教芸を基本にそれをちょっと発展させていくみたいな、そういう動きがあります。あと最近の日本の伝統文化、それから世界の音楽ということに対する理解ということも、非常に意識的に取り上げられていたというふうに思いますが、やはり教芸の手堅い編集というのは、音楽を専門に教える先生にとっては使いやすい、そして子どもにとっても興味を持ち、そして発展性も図れる教科書だということで、教育芸術社を推薦いたします。

○【佐藤委員長】 米田委員から教育芸術社を推薦していただきました。

中村委員。

○【中村委員】 私も系統性や曲の多さなどから考えると教育芸術社がいいかなと思います。ただ、市民アンケートでは「教育芸術社を採択しないで」という意見もありました。その意見は「君が代」の扱いや位置についてだったと思います。音楽教育そのものに関する批判は具体的にはなかったように思ったのですが、ただ、それに関連して気になったのは、教育芸術社の日本の歌の扱いが、心の歌ということで、日本人というのを少し重く出しているのかなという感じがしたこと。もちろん、いろいろな技法とかメロディーとかで、各地の固有性や伝統もあると思いますが、その一方で、音楽というのは、人々の感情の発露として、言葉の通じない人も音楽で広くつながっていくという普遍性が大きいものでもあると思うので、あまり日本人という感じで日本の歌を勉強しないほうがいいのではないかというふうに思いました。

各社いろいろと特徴があって、教育出版は創作を随分と強調しているのだなということがわかります。

気になったことが1つどこかにあったのですが、今思い出せないの、また後で言います。

○【佐藤委員長】 では、先に私の意見を申し上げます。

私も教育芸術社がよいと思いました。理由は、歌唱、器楽、音楽づくりに関することと、鑑賞の教材数のバランスがとれていると思いました。また、巻末も含めて楽曲が豊富でした。それから写真や挿絵が楽曲に合っていて効果的であると思いました。また、米田委員もおっしゃっていましたが、鍵盤ハーモニカやリコーダーの指遣いなど子どもたちが比較的つまずきやすいと思うところが、写真や絵が大きく視覚的にわかりやすく丁寧であると思いました。内容的には、非常にハイレベルの教科書かなと思いました。

先ほど米田委員から1年生から「拍」を扱っているというお話がありましたが、1年生から手拍子で「拍」を感じるというところから始まっていました。名前遊びをしながらリズムをとったり、手や指、楽器を使いながら「拍」を意識するということも丁寧に進めていました。2年生では2拍子、3拍子、3年生では再び3拍子、4年生では6拍子と、必ず何拍子というのを習った後で、3拍子なら3拍子、6拍子なら6拍子の曲を鑑賞して、拍の違いを耳で聴いて実感をするということを必ずやっていました。また、2年生では旋律遊びを取り入れ、3年生で旋律を意識して鑑賞を進めていました。また、中学年では音楽のまとまりや旋律を学び、高学年ではさらに旋律の美しさや曲想を意識して音楽に触れるという学習を進めていました。

審議結果の報告にもありましたが、系統性があり、前後の教材の関連や表現と鑑賞の関連が図られていて、学んだことを次の教材に生かすことができる。それは非常に大切なことだと思いました。また、全体を通して教育芸術社の教科書は、子どもたちの発達段階に応じていろいろな音楽に数多く触れて、音楽の基礎的な力をつけながら音楽を楽しむ素地を育てるということに重きを置いているのではないかと思い、推薦をしたいと思いました。

中村委員。

○【中村委員】 思い出しました。直接音楽にかかわることではないのですが、嵐山委員の発言でタイトル名が東京書籍は「新しい音楽」というのがよくないと。ただ、これは東京書籍のブランド名みたいなもので、全部の教科書のタイトルが「新しい～」となっています。

○【嵐山委員】 だから、みんな反感を持ってしまう。「新しい」、そこがだから嫌なんです。

○【中村委員】 そうですか。

○【嵐山委員】 私は古いものが好きだから、「新しい」とつけられると、「新しい」ということを価値にされると、ちょっと体質の問題です。

○【中村委員】 私が申し上げたかったのは、内容として古い音楽に対して新しい音楽ということではなくて、音楽の教科書としてのオーソドックスな名前は既に他の会社が使っているので、「新しい」音楽の教科書、教科書として「新しい」ということを東京書籍は多分言いたいのではないかなと、それを言おうと思ったのです。

○【嵐山委員】 わかりました。東京書籍に親しい友人おられますから、よく言っておきます。

○【佐藤委員長】 言葉のとらえ方にもいろいろございますが、各委員からは音楽につきまして教育芸術社を推薦していただきました。

それでは、音楽につきまして教育芸術社を採択することによろしいでしょうか。

(「はい」と呼ぶ者あり)

○【佐藤委員長】 それでは、音楽は教育芸術社を採択することといたします。

続いて、図画工作に移ります。ご意見を伺いたいと思います。

ご意見いかがでしょうか。

中村委員。

○【中村委員】 それでは、現在も使っていると伺いましたが、図画工作は開隆堂がいいのではないかと思います。教科書を見ると、参考作品の写真がとても大きくて、こんなものがつくれるのだということでイメージがしやすいと思います。全体としての雰囲気明るく楽しいというか、そういう感じがします。

それから一番最初に「ちいさな びじゅつかん（小さな美術館）」というコーナーがあって、そこでの作品の選び方も、シャガールとか、好みで言うてはいけないかもしれませんが、私としてはいい感じがします。全体的に、図工が楽しくて、子どもたちもやってみようと思えるというか、こんなのできるのだという、そういう感じがしたので、開隆堂がいいと思います。つくり方とか、そういうのも随分丁寧に書いてあったと思います。

以上です。

○【佐藤委員長】 中村委員から開隆堂を推薦していただきました。

嵐山委員。

○【嵐山委員】 図工は開隆堂です。開隆堂の図工は昔から、よくできていますよね。工具箱などいいですね。図工の授業というのは楽しいから、子どもたちのイメージがあれもつくれる、これもつくりたい、どんどんそういうものを気持ちを高めさせるためには、開隆堂のがやっぱりなかなか一番一歩抜きに出ているという感じがいたします。

○【佐藤委員長】 ありがとうございます。嵐山委員から開隆堂を推薦していただきました。

米田委員。

○【米田委員】 今、お2人の委員から開隆堂を推薦されましたが、私も同じく開隆堂を推薦いたします。まず、教科書をすぐ見てわかることは、明るく楽しい子どもたちの作品がかなり大きくたくさん載っているということです。そしてただで楽しいという、そういう雰囲気のある教科書ですが、内容を見ますとかなり1年生から6年生までで系統的発展というのを考えて、例えば粘土にしても1年生でつくる粘土、3年生でつくる粘土とは少し違えて、それも子どもたちの作品をかなり大きく並べることによって、あっ、こういうふうにつくると動物らしく見えるとか、そういったことが非常によくわかる、そういう工夫があると思います。

さらに上の学年になると、粘土でつくったものを焼いてみる、焼き物につなげているというような、そういう系統的発展が1年生から6年生の間に見られます。あと版画に関しても、そういう形で何回か出てきますけれども、それぞれだんだん技術が上になって、そして子どもたちの見方も深くなって、そして素晴らしい作品ができるという、そういう系統性の発展を非常によく考えて編集してあるというふうに思いました。

そして教科書の見開きで1つの課題が非常に詳しく書いてあるということも、非常に見やすいというふうに思いました。ほかに教科書ですと半ページで1つの課題ということがあったりとかいうことになると、説明文が多くなったりとかいうことで、非常に1つの課題についての詳しさというのがちょっと欠けるようなことがあると思いますので、そういう意味では見開きで1つの課題があり、そして写真が大きく色もきれいでわかりやすいということが非常にいいと思いました。

あと鑑賞作品が「みんなのギャラリー」という形で、ちょうど見開きのところにあって、しかもそれを例えば風を感じるみたいな形で、それが俵屋宗達が出ていたりとか、そういう有名な作品が出つつ、そして子どもが風を感じた絵も同じように出ているという、そういう大作家と子どもたちが同じ



立場でいい作品が並べられているというところが、子どもたちにも非常に絵というものは自分でもすごいのが書けるのだという、そういう動機づけになるということで、非常にそういを工夫がよかったというふうに思います。あと道具箱とかいう形で、工作に関しては道具の使い方を一番最後のところに非常に詳しく書いてあるので、そういったことも巻末も非常に工夫してなされているというふうに思いました。

とにかく鑑賞する作品が非常に多いというのも、やはり開隆堂の特徴だったように思います。新しい作家として、シャガールとか草間さんなどという非常に特徴的な作品をつくれる草間彌生さんの作品が載っていたりとか、楽しい作品が載っていて、そういう小さいときからいい作品というのを見るという、そういう習慣を持つということも非常にいいと思いました。

○【佐藤委員長】 米田委員から開隆堂というご意見をいただきました。私も開隆堂を推薦したいと思います。理由は、教科書という限られたスペースにいろいろな大きさの作品が数多く紹介されていました。写真とともにとても色鮮やかで、皆さんおっしゃっていましたが、明るく躍動感があり、子どもたちが作品をイメージしやすく、楽しく作品をつくり上げることができるのではないかと考えました。

また、「ちいさな びじゅつかん（小さな美術館）」「ゆめをかたちに」「みんなのギャラリー」「つながる ぞうけい（つながる造形）」と構成も非常に工夫がされ、一貫性がありました。また、子どもたちが作品をつくる上で工夫したことや感じたことや考えたことなどが文章で添えられていました。また、鑑賞についても、題名を考えてみたり、見つけたことや何が書かれているかなど見る視点や考える視点が具体的で、グループで想像してみたり、それを話し合ったり発表したり、かかわり合い、伝え合うという活動も設定されていました。また、それぞれのタイトルにも夢や工夫を感じました。

それでは、各委員からご意見を伺いました。図画工作については、開隆堂を採択することによろしいでしょうか。

（「はい」と呼ぶ者あり）

○【佐藤委員長】 それでは、図画工作は開隆堂を採択することといたします。

続いて、家庭科に進ませさせていただきます。ご意見をお願いいたします。

嵐山委員、お願いします。

○【嵐山委員】 さっきの中村委員の「新しい」というタイトルは、算数とか生活科、新しいものもいい場合もあるのです。生活は新しいほうがいいし、だけれども文化や音楽、国語などは別に、新しいものもいいけれども、蕪村が出てきたり、昔の偉人が出てきたり、文化や音楽、国語は必ずしも新しいければいいというものでもない。ただし、今気がついたのでけれども、私は「新しい」というのに反応してしまう。家庭の場合、こういう場合は「新しい」としていいと思うのです。だから東京書籍の課題は、ここで言うべきことではないけれども、全部「新しい」でくくってしまうことが問題です。だから、それを考えたほうがいいと思う。1つそれだけ。その意味で言うと、東京書籍の「新しい家庭」というのは、「新しい」からといって新しいほうがいいと思います。タイトルとしてその意味での難点はないという気がいたします。

以上です。

○【佐藤委員長】 嵐山委員から東京書籍がよろしいのではないかと意見をいただきました。ほかにご意見いかがでしょう。

米田委員。

○【米田委員】 家庭科は2社ですので、東京書籍か開隆堂ということになります。国立市では、今まで開隆堂を採用しておりました。それで、今回の採用に関しては、私は東京書籍を推薦させていただきたいと思います。基本的に家庭科、最近では男女同じに学ぶわけですが、「できる自分になっていこう」という大きなテーマがあって、いわゆる家族の一員としての自覚を実際の生活の中でいろいろな料理ですとか片づけですとか裁縫ですとか、そういったことも含めて実技を身につけつつ、しかし実技を身につけるだけではなく、家族の一員としての自覚を高める。そういうことが東京書籍の本の編集の中心になっている、そこがまずいいというふうに思いました。

そして、それぞれ各章で「めあて」が非常にはっきりしてしまっていて、基礎とか基本、そういったものを的確に押さえながら、子どもたちも料理をやってみようかな、家でもやってみようかというような関心を起こさせるような工夫がされていると思いました。

見開きでいろいろレイアウトが統一されていて非常に見やすいという、そして自分でもそれを見ればやれるかなというような編集になっている。写真もきれいですし、そういった形での興味、関心を引き起こさせるという工夫が非常に意図的にされているというふうに思いました。

そして一人ひとりの個性を大切にしながら、さらにもっとできる子はここまでやろうというような発展の方向も見えているというところが教科書の特徴だというふうに思います。そして何より家族の一員になるということで、学習したことを家庭生活で生かそうという、そういう工夫が全体のところで一貫して見えるという、写真が豊富で字も大きく、そしてゆとりがあって読みやすいという、それほどたくさん情報を詰め込まないで重要なところだけをわかりやすく興味深く読ませる工夫というのがあったということで、東京書籍を推薦いたします。

そういう形で、実際に動けるということと同時に、いろいろな技術が高まると同時に、子どもが家庭人としての自覚を持つということが、これからの社会、家庭にとって重要なのだろうというふうに思いました。

以上です。

○【佐藤委員長】 米田委員から東京書籍を推薦いただきました。

中村委員。

○【中村委員】 私も東京書籍がいいと思います。先ほどの嵐山委員の発言につなげて言うと、「新しい家庭」というのがタイトルにあって、その上で東京書籍の表紙は、男の子がお茶を入れていて、お父さんがテーブルにお茶をセットして、お母さんは庭で水まきをしていて、女の子はリビングの新聞の片づけをしているということで、今までのパターンとあえて違うことを意識した表紙だということがわかります。こういう点で表紙もよかったと思います。

内容の点で言うと、調理の手順で両方の教科書を見比べて、何が違うかなといろいろ見たのですが、やはり東京書籍のほうがわかりやすく、イラストも見やすいものでした。

気になったのは、表紙はとてもいいのですが、「考えよう 買い物と暮らし」というところで、スーパーでメモをとっている写真が男の子1人なのです。開隆堂のほうは、「じょうずに使おう 物やお金」というところで男の子と女の子がスーパーでメモをとっています。先ほどから申し上げるように、分析的、論理的、そういう役割を男の子に割り振ることが多い中で、開隆堂は2人を出しているというところがいいと思います。

もう1つは、せっかくいい表紙なのに、東京書籍は「まかせてね 今日の食事」というところで頑

張っているのが女の子です。そういうところも指摘したいと思います。

そして、東京書籍は、ご飯とみそ汁というのを日本の伝統というふうに位置づけて書いているのですが、開隆堂はそのような位置づけではなく、みそ汁とご飯が出てきます。伝統というか、古くから伝えられて大事にしたいものという点で、私もみそ汁とご飯が大事だと思うのですが、私は子どもが食物アレルギーで一時期お米も食べられなかったときに「お米が食べられないなんて日本人なのか」というふうに言われたことがあるんです。日本人にとってご飯とみそ汁は大事かもしれないけれども、それが食べられないときに「日本人なのか」と非難されたという苦い思い出があって、それを考えると東京書籍の、そんなにご飯とみそ汁を日本の伝統とやらなくてもいいのではないかなというふうに思いました。

以上です。

○【佐藤委員長】 中村委員から東京書籍を推薦したいというご意見でした。

私も東京書籍を最終的に推薦したいと思います。主に調理やミシン等の実習に注目してみました。ほかの委員からもお話がありましたが、特に調理実習の流れは左から右へという統一された流れで、とても丁寧で見やすくわかりやすかったです。これは子どもたちのつくる意欲につながるのではないかと思います。また、ミシンの扱いもとても丁寧で図や写真も多かったです。上糸、下糸、また、ボビンケースの操作など、今はなかなか各家庭にミシンがあるのかどうかわかりかねる中で、とてもわかりやすく工夫されていると思いました。いずれにしても、写真やイラストが非常に鮮明で効果的だったと思います。

また、重要語句がわかりやすく、必要な基礎・基本を常に確かめられるように工夫がされていました。また、教科書の初めに食育チェックと環境チェックというのがありました。これは身近なことから実践しようということで、5年生の初めにまず自分の生活を振り返ってみてチェックをし、さらに6年生の終わりに再びチェックをするという流れです。これは学習の成果として実践できているかを確認できると思いました。また、このチェック表を含めて東京書籍には実際の生活へと生かす工夫が教科書全体を通して感じられました。

また、開隆堂につきましては、丁寧な記述や資料がとても豊富だったと思います。ただ、審議結果の報告書に「情報量が多い」とありましたが、私も同じ感想を持ちました。

それでは、家庭については、皆様から東京書籍を推薦していただきました。

東京書籍を採択することによってよろしいでしょうか。

(「はい」と呼ぶ者あり)

○【佐藤委員長】 それでは、家庭は東京書籍を採択することといたします。

続いて、保健に入ります。皆様のご意見を伺いたいと思います。

米田委員、お願いします。

○【米田委員】 保健は、かなり各社特徴ある編集をされていましたが、その中で学研の教科書を推薦いたします。それは、際立って学研の特徴といいますと、3～4年、5～6年というふうになっているわけですが、3～4年の教科書において、子どもの体の変化、思春期への変化というのを非常に具体的に教えている。さらには、高学年になりますと心の健康という形で、今までけがをしないとか体の健康というのはありましたけれども、心の健康という項目を設けて、生活と密着する、そういう問題を非常に詳しく記述しているという特徴がありました。

そして、自己の健康増進ということを実現するための方策として、ロールプレイングというような

やり方を取り入れて、興味を持つ、子どもが本当に悩んでいる状況が非常に解決できるような、そういう点を中心に内容が記述され、子どもが本当に関心、意欲、そういったものを保健に対して持つ。そして自分の体の成長や心の変化、そういったものを成長期にだれでも経験する、そういう悩み、そういったものも具体的に解決するような、そういうような編集方針になっていたところが非常に新しい、新しいと言ったらいけないのかもしれないですけども、現代的な問題ということで、本当に子どもが今、直面している問題に答えようという、そういう編集になっている点が非常に良かったと思います。

さらに写真とかイラストとかというものも非常に効果的に、例えば喫煙についての問題などのときにも、喫煙を長年している人とそうでない人の肺の写真をはっきり並べてあるみたいな形で、それは学校だけで習うだけではなくに、お家に持って帰って家でも親御さんにも見てもらえたらみたいな写真もたくさんありました。そういうことで学研の教科書を推薦させていただきます。

○【佐藤委員長】 米田委員から学研の推薦をいただきました。ほかにご意見いかがでしょうか。

中村委員。

○【中村委員】 私も、学研教育みらいというのが会社の正式の名前だそうですが、学研のがいいかなと思いました。全体的に、心の健康と体の健康ということで、その年代、3～4年生、そして5～6年生の心に注目しているというのが各社非常に特徴的といいますか、少なくとも私たちが学んだころよりは随分と子どもの心の健康が重要な課題になってきていると思います。しかも、それを子どもたちが自分のこととして身の回りのことから考えるということのを促していると思います。学研では、例えば仲間外れになったときのことを考えさせたり、記入欄が多くて、子どもたちが自分で考えたことを記入しながら学べるようになっていたのがいいと思います。全体的にすっきりしていて、無駄がなくていい感じがしました。

ジェンダー的にはどの会社も、保健の先生は女で校医さんが男でした。これは現状がそうだと思いますけれども、その中でスクールカウンセラーの人が出てきたりとか、いろいろな登場人物も出てきています。

先ほどの題名のことで言うと、東京書籍は「あたらしい保健（新しい保健）」、大日本図書は「たのしい（楽しい）」というのがキャッチフレーズになっていまして、学研は「みんなのほけん（みんなの保健）」、文教は「わたしたちのほけん（私たちの保健）」というふうに、それぞれ会社ごとにシリーズ名が決まっているというか、そんな感じだと思います。

以上です。

○【佐藤委員長】 中村委員からも学研教育みらいがよろしいのではというご意見を伺いました。

嵐山委員、お願いします。

○【嵐山委員】 私も学研がいいと思います。

以上です。

○【佐藤委員長】 私も意見を申し上げます。

私も学研を推薦したいと思います。理由は、健康、安全に関する基本的なことがしっかり押さえられていると思いました。また、写真も鮮明で、イラストとともに非常に効果的であり、何より見てわかりやすい、使いやすい教科書だと思いました。また、チェック項目や記述式の書き込みなど、主体的に学習に取り組めるように工夫され、問題解決型の学習として効果的な活用が可能ではないかと思いました。

また、先ほど少し話が出ましたが、学校医、薬剤師、保健師の先生、スクールカウンセラーなど身近な職種のかかわりのある人たちの話が豊富に載せてありました。とても具体性があり、説得力があると思いました。

また、発展的な内容についても、熱中症の症状と予防や手当の仕方、新型インフルエンザ、化学物質による病気、アレルギー性の病気、AEDの紹介、また、副流煙、いわゆる受動喫煙についても簡潔に触れられていました。いずれも今日的な課題であり、具体的な例示がありました。また、作文や事例も多く取り上げてありましたので、自分の問題として取り組むことができる教科書であると思いますので、学研を推薦したいと思います。

皆様から保健につきまして学研を推薦していただきました。

それでは、保健につきましては学研を採択することよろしいでしょうか。

(「はい」と呼ぶ者あり)

○【佐藤委員長】 それでは、保健は学研を採択することといたします。

これで小学校全教科の教科用図書の採択が終わりました。

5月の中旬より、約2カ月半にわたり小学校全教科の教科書を読ませていただきました。教科用図書審議会の審議結果の報告、また、アンケートを受けまして、さらに調査研究を進めてまいりました。教科用図書審議会及び教科用図書調査研究委員会におかれましては、子どもたちの現状や課題を踏まえて具体的な審議を行っていただき、また、授業改善へかける先生方の思いが伝わってくるような報告書で、大変うれしく、また、心より感謝いたしております。この教科書を活用して、子どもたちのためによりよい授業を進めていただくことを願っております。

それでは、確認のために事務局から本日選択いたしました教科書を読み上げていただき、確認していただきたいと思います。

悴田学校指導課長、お願いいたします。

○【悴田学校指導課長】 それでは、ただいま採択いただきました結果について確認させていただきます。

国語については光村図書出版、書写については光村図書出版、社会・教育出版、地図・帝国書院、算数・東京書籍、理科・教育出版、生活・東京書籍、音楽・教育芸術社、図画工作・開隆堂出版、家庭・東京書籍、保健・学研教育みらい、以上でございます。

○【佐藤委員長】 ありがとうございます。ただいま悴田学校指導課長から全教科について採択図書を読み上げていただきましたが、間違いはございませんでしょうか。

(「はい」と呼ぶ者あり)

○【佐藤委員長】 よろしいですか。

(「はい」と呼ぶ者あり)

○【佐藤委員長】 それでは、ただいま学校指導課長から読み上げられました図書を、平成23年度の国立市立小学校使用教科用図書として採択いたします。

これをもちまして、小学校教科用図書の全教科書の採択が終わりました。どうもありがとうございました。

これをもちまして、本日の臨時会を閉会いたします。

なお、次回の教育委員会は、定例会を8月24日火曜日、午後2時から、会場は教育委員室で開催することが決定しております。

傍聴の皆様、お暑い中をお疲れさまでございました。

午後 3 時 0 8 分閉会